



地層のきほん—見方のポイントがよくわかる

誠文堂新光社

ISBN978-4-416-21008-6

定価1,600円+税 143頁

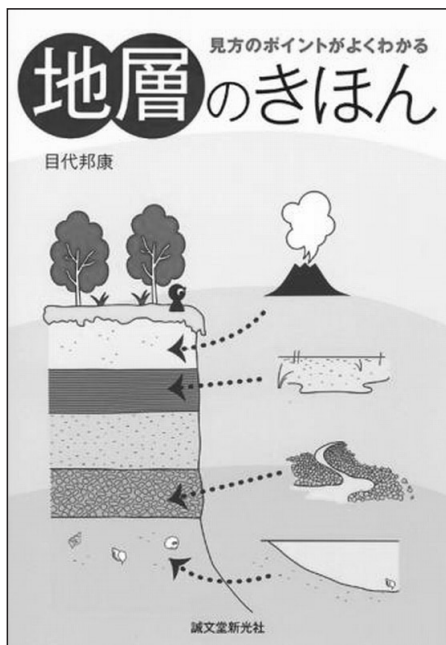
目代邦康 (著)

自然保護助成基金研究員

著者の目代邦康氏と私は、彼が当時筑波大学陸域環境研究センターで副手をされた時以来のお付き合いがある。当時の彼は京都大学大学院の学生時代、フィールドワークを主体とした大井川上流域の斜面崩壊地形の研究で名を馳せ、千木良雅弘教授から学位を取られたばかりの新進気鋭の地形学者であった。池田 宏先生に筑波大学に招聘されてからは水理実験にも開眼され、先生と共に我々に度々新しい大型水理実験を披露してくださったことを楽しかった思い出として記憶している。今振り返ってみても、周到かつ大規模な堆積実験の準備は大変な労力と時間を要したと思う。しかし彼はいつも笑顔でセンターに我々を迎え入れ、決して愚痴を言うことも、疲れた顔を見せることもなかった。彼の忍耐強い性格と誰からも愛される人柄の良さを当時から感じとっていた。

その後、産総研の標本館にテクニカルスタッフとして在籍され、青木正博館長のご指導の下、地質学のアウトリーチの分野でも見事に開眼された。その適応力の高さには目を見張るものがあった。そして、多くの人に惜しまれながら、標本館の非常勤職から現在の自然保護助成基金研究員に転職されたが、その後も私自身は度々お付き合い頂いている。

平成22年4月、目代氏が「地層のきほん」というタイトルの一般普及向けの解説書を執筆し、誠文堂新光社から出版された。この本はタイトルからして地質学の専門書ではないのだが、それは見かけであって、ここに取り扱われている62の項目は、実はどれをとっても最新情報であり、実に幅広く、かつ奥深いことに驚かされる。例えば、項目38の「津波の地層ってなんだろう？」の記載は、最近、世界的に話題となっているものであり、産総研地質調査総合センターが世界に先んじている研究テーマの一つである津波堆積物研究の解説である。項目61の「地球に暮らす私たち」で解説されている1972年にローマクラブが示した人類の「成長限界モデル」の検証は、燃料資源の枯渇や地球温暖化を含めた地球規模での重要な研究テーマの一つである。これらの地層解説の項目に対して、それぞれ2頁ずつ「きほん」を重視した分かりやすい解説文とエッセンスを凝縮したシンプルな図や写真が付けられている。各項目に出現する目代氏をイメージさせるマスコットも実にチャームングである。特に、これ



らの図のシンプルさは、常に多量の情報の中から真理を読み解くことを生業とする我々のような研究者にもプレゼンの仕方として大変勉強になる。確かに、この本を読めば、地層の見方のポイントが分かるようになるであろう。そしてこの62項目を読破すれば、地質学の基本を全く知らない学部生、小中高校の理科教員であっても、最新の地層の成因論や地層から得られる情報について基礎から学べると私は思う。特に、大学の一般教養の講義に使う教科書として、是非推奨したい。

ここであえて苦言を述べるならば、掲載されている図や写真が残念ながらフルカラーではなかった。もしフルカラー版であれば、さらに読者の理解度が高まったであろうが、これはおそらく143頁で1,600円という低価格を考慮するならば、目代氏や出版社としては仕方ない選択だったのかもしれない。一方、同じ出版社から出されている「地層の見方がわかるフィールド図鑑」(ISBN 978-4-416-20814-4 ; 2,200円)はフルカラー版であり、この2冊を併せて読むことによって地層に対する理解が格段に進むことであろう。

これまで科学立国を自称していた我が国において、理科教育や地学教育の危機がマスコミでも広く取り上げられる今日にあって、サイエンスコミュニケーターとしてアクティブに活躍する目代氏にエールを送り、今後も友人として、一研究者として可能な限り彼の活動を支援していきたいと考えている。

(産総研 地質情報研究部門 七山 太)